

血どろろ組

高木彬光

The background is a vibrant red, decorated with expressive black ink splatters and thin, flowing lines that resemble brushstrokes or ink trails. A central vertical bar, outlined in black, contains the title and author's name in white Japanese text.

血どろろ組

高木彬光

血どくろ組

三四〇円

昭和三十八年二月二十五日印刷
昭和三十八年三月一日発行

著作者 高木彬光
発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
東京都新宿区牛込払方町一
振替口座・東京二一七五七

血
ど
く
ろ
組

目次

去年の雪去年の人	五
謎の虚無僧	六
鬼火の井戸	七
迷路の怪	七
血どくろ組	八
白龍青龍	二六
阿片煙草	二六

神秘の扉

一〇

翁の仮面

一三

情炎蟻地獄

二四

魔女狂女

三六

風堂に満つ

三八

恋と罪とを焼く焰

三〇

装幀 中尾 進

去年こぞの雪去年の人

ひどい暑さだ。男も女も、道を行くものは頭のとつぺんから、足の爪先まで、べつとりと汗にまみれ、その上に埃がくつついて、鶯餅のような顔になっている。

「ええ、暑いな。何てえ暑さだろう。まるで頭が狂いそうだ。風がねえんで、今日はよけい、鍋の中でいりつけられるようだぜ」

目明し、茗荷屋の伝吉、一名小猿の伝吉といわれた腕ききだが、この暑さには勝てないのだろう。本郷三丁目の近く、加賀様御屋敷前までやってきたかと思うと、後について来た、子分の松七をふりかえつて、見得も外聞もいつておられぬ悲鳴をあげた。

「全くですねえ。親分……おいらあもう、息が切れて、一步も歩けねえんだ。お上の御用をきいてる悲しさには、まさか、裸で道中もならねえし、つめてえ白玉でもおごつておくんなせえな」

手拭で顔の汗をふきふき、息をはずませて、松七が情なさそうな声を出す。

「つめてえ白玉も結構だが……うむ、いいことがあらあ。松、おめえ、ここをどこだと思つている」「昼日中から、そんなに凄まじくてもいいじやありませんか。ねえ、親分、本郷もかねやすまでは

江戸のうち——てえ川柳があるくれえだから、ここはまだ江戸だと思いますが違いやすかねえ……それとも、地獄のかまのふたでも開いたか。火焰山にでも近づいたかな」

兼康といえば、本郷三丁目十字路の角から二軒目の小間物屋である。元禄時代、兼康祐元という町医者が発明したという、赤い色の歯磨粉と、堀部安兵衛の筆をとった「かねやすゆうげん」という平仮名の看板のために、名をあげた家なのだ。この家あたりが、当時の江戸の限界だったというのだから、花の大江戸八百八町——といつても大した広さではない。現に、ここからちよつと行くと、森川宿に板橋宿——中仙道の道中が始まり、夜などは、一人で歩けぬほどのさびしさである。

「で、今日は何の日だと思つてゐる——？」

「いやですねえ。親分、まるで謎をかけられているみたいだが……ああ、わかつた、今日は土用の丑の日だ。御用がすんだら、鰻で一杯……」

「そうじゃあねえよ」

ひだるそうに、伝吉も首をふつて、

「場所は加賀様御屋敷前、日は七月の十三日——ほら、加賀様の御雪蔵びらきの日じゃねえか」

加賀侯の御雪献上——これは、江戸大奥における年中行事の一つであつた。つまり、屋敷まわりの空地に大きな穴蔵を掘り、桐の箱に献上の雪をつめ、そのまわりをまた数万貫の雪で密封して年を越

す。そして七月十三日、蔵を開いて、將軍家へ箱入の雪を献上するのである。

真夏の土用の最中に、雪に舌づつみをうつというのは、將軍家ならではの栄華であつたが、加賀様のお雪が上つたときけば、盲長屋の店子はいうまでもなく、遠近貴賤の差別もなく、この雪蔵へ殺到して残りの雪に舌づつみを打つ……江戸時代としては、これが真夏に庶民が氷を口に出来る唯一の機会であつた。この日折良く、このあたりを通りかかつた伝吉が、このことを思い出したのも、むりはないが、これをきいた松七も武者ぶるいして、

「違いねえ。やつぱり、うちの親分は目が肥えてるねえ……さ、早く行きやしようぜ、お雪さまのとけねえうちに……」

と先に立つた。

石の穴蔵——といつても、一度錠を開いて中の桐箱を掘り出してしまえば、もうそれまで、御家中一同に配分しても、しまつておくことの出来ないものだから、大した量ではない。そのあとをこうして、市民の自由にまかせるのも、火消に華美な服装をさせたり、人気力士を召しかかえたりするのと同じく一つの人気とりの政策でもあらう。

何千、何百という町人が、手に手に土瓶や鉢、井などを持ち出して、余つた雪をほおばつては、「どうでえ。この冷さは……今日ばつかしは暑さ知らずだぜ……こてえられねえや」

「公方様と同じ栄華をしてると思うと、全く有難涙がこぼれるわい」

など口々に、勝手な熱を上げているのだ。

「御免な、ちよつと御免ねえ」

と、伝吉が人混みをかきわけようとしたとき、

「死人だ！ お侍が死んでいる！」

という叫びが後から聞えて来た。

「殺しだ！ お侍が殺されている！」

武士はくつわの音にも眼をさます——といわれているが、人殺しときいては、伝吉もそのまま見のがしには出来なかつた。年こそとつたが、若い時には隼といわれた両眼を輝かして、

「松、来い」

と、十手を握りしめて先に立つた。

その広場の一角、こんもりと松や杉の生い茂つた小さな林の中に、一人の武士が倒れている。黒紋付の紋所は剣かたびし、この陽気にはちよつと暑そうな衿の身なりなのだ。

「親分……」

「うむ」

年のころは三十をちよつとすぎたばかりと思われる。苦味ばしつた、下ぶくれ色白のなかなかの美男子だが、頭でもやられているのか、額の生えぎわに、かすかに血のあとがにじんでいる。しやがみこんでその顔をのぞきこみ、左手の脈などつついていた伝吉は、

「松、雪をとつてこい」

とすどくいつた。

「へえ……」

「このお侍さんは、死んでるんじゃないやねえ。怪我をなすつたのか、それとも暑さでやられたか——とにかく、氣を失つて倒れてるんだ」

「へえ」

小走りに、雪藏の方へ走つて行つた松七が、誰から借りたか、土瓶を持つてかけもどつて来た。

手拭に雪を包んで額にのせ、土瓶を唇にふくませて、

「旦那……旦那……」

と伝吉は、その侍の体をゆすぶつた。

次第に顔には赤らみが戻つて来た。ふ、ふ、ふと、かすかな声が口からもれ、やがて、とろんと酔つたような両眼が開いた。

「かたじけない……拙者としたことが、思わず不覺をとつた……」

地上にゆつくり半身を起して、その侍がつぶやいた。

「どうなすつたんで、旦那」

「なに、昨夜、ふしぎな黒装束の一味におそわれ、刀をぬいて囲まれた。こちら刀をぬいたと思つたとたん、闇の中から、大きな石のようなものが飛んで来て、額をうたれ、そのまま氣を失つてしまつたのだが……」

不審そうに、あたりを見まわして、

「ここはどこだ——？」

「へえ、加賀様御守殿屋敷の御囲い外、御雪藏のそばなんでさあ」

「みんなは何をしているのだ——？」

「へえ、御雪献上のおあまりを頂戴に」

「御雪献上、そんなはずは！ そんなこと！」

憑かれたような眼の色だ。まだ、さめきれない悪夢にでも、悩まされているような顔色なのだ。

「でも……」

「今日はまだ五月ではないか……五月に御雪献上など！」

「旦那、冗談おつしやつちやいけませんや、今日は七月——七月の十三日ですぜ」

「七月……」

愕然としたように、その侍は眼を見はつた。焼きつくようなこの暑さ、あたり一面の蟬しぐれ……そして、そのまわりをとりまいてゐる人々の服装を見て、

「はて、拙者は夢でも見ているのか。はて、そのようなはずはないが……」
と何度も不審そうにくりかえした。

「旦那、御屋敷はどちらでございます」

「小日向台町、直参桐島伊織と申すが」

「桐島さま！」

「どうかしたのか」

「いえ、何でも……」

「そなたの名前は」

「お上の御用をきいております、茗荷屋伝吉と申しますが」

「伝吉か、えらく世話になつたのう。このお礼はあらためていたすが……」

「いえ、お札などには及びません。もうお歸りでござんすか。お氣をおつけになつて、お歸りなさ

いまし」

まだ、酔つているような、よろよろとした足どりで、この場を去つて行く、桐島伊織の後姿を、伝吉は喰い入るような眼で追つていた。

「おかしい。あのなりは……この暑さ、この陽氣にあんなものを着て歩いていたとすれば、まるで気がい沙汰だがない……」

桐島伊織といえば、たしかに、十手を預る人々にとつては初めての名でもあるまい。天保十三年の春、徳川幕府の土台骨を揺ぶろうとした、將軍暗殺の大陰謀——怪奇きわまる「蛇神様」の事件の渦に巻きこまれ、その奸策の犠牲となつて、罪なくして、大江戸八百八町にかくれ家もなくなつたことのある身の上なのだ。その疑いはれ、蛇神の正体も、時の北町奉行、遠山左衛門丞景元の明智果斷によつて、白日の下にあばき出された。ただ事のあまりに重大なのに恐れた幕府当局は事に秘密の朱印をおし、関係者一同の口をかたく封じて、事件全体を暗闇の中に葬つてしまつたのである。それから四年……伝吉も、記憶の底に消え去ろうとしていた、かつてのおたずね者の名を、この瞬間、ふい頭に思い浮べたのであろうか。

しかし、伊織には、何とも仔細がわからなかつた。駕籠を飛ばして、小日向台町の屋敷に帰つて行

く途中も、どうして五月の二日に家を出たはずの自分が、七月の十三日に、加賀様御屋敷外に倒れて
いたか——その秘密が理解出来なかつた。

二ヶ月のあいだ、氣を失つて——そんな馬鹿な！と彼は心につぶやいた。この二ヶ月をおぼえも
なく——そんな馬鹿げた、そんな氣ちがいじみた話が、この世にあつてたまろうか。

門前に立つて、伊織はしみじみと、自分の屋敷を見まわした。變つてはいない——どこも、自分が
父左膳の家督をついで、この屋敷の主となつた時と全く同じ姿だ。

ただ、庭の木々のよそおいだけが、目にしみるような緑の色、濃い真夏の姿であつた。ただ、彼の
身につけているよそおいだけが、時ならぬ、若葉の頃の姿であつた。

幽霊屋敷にでも入つて行くような、自分にも納得出来ない、妙な氣持で、伊織は門内の白砂をふん
で、玄関の方へ歩いて行つた。

「旦那様が……旦那様がお歸りになつた！」

突然、庭のどこかで男の叫び声が聞え、伊織が、玄関前に立つと同時に、バタバタと、たしなみも
忘れてしまつたような足どりで、奥から、若い女がかけ出して來た。

真琴なのだ！蛇神事件のどす黒い秘密の渦の底から、伊織が必死の努力を重ねて、間一髪のとこ
ろで救い出して來た純情可憐な新妻だつた。

どうしたことが、真琴は伊織の顔を見ると、幽霊にでも出あつたように、顔色をかえてたたずんできました。

「あなた……あなた……」

突然、思い返したように、式台の上に手をつかえて、

「まあ、わたくしとしたことが、武士の妻ともあろうものが、思わぬお帰りにとり乱しまして……この三年の御苦勞は、さだめて御大變なものだつたでございましょう。よう、御無事でお帰り遊ばしました」

「三年……」

いくらかやつれを見せた恋女房の、頬につたわる涙を見て、伊織は呆然とつぶやいた。

「三年とは——？」

「あなたが御屋敷をお出ましになつてから、もう三年あまりでございます」

「そんなはずは！ そんな話は！」

おどろいたように、真琴は夫の顔を見あげていた。

「今日までは、何か、御城内御重役かどなたかの秘密の御使命で、どちらかにしのでおられるのかと存じました……」